平成３０年度岐阜県大会

生徒講評文

８月　２日　３校目　　岐阜総合学園　高等学校

SとNの間の香り

（潤色・創作）

テーマは「生と死」「犠牲」「今を生きる」だと考えた。「壁も床も真っ白」「何もない部屋」など無を思わせる台詞で、その空間は死後の世界を表していた。また、東京の夜を明るく照らしているのは、燃料として燃やされ死んでいく田舎の少女達であり、彼女達の悲哀が強調され、東京と田舎の明暗の対比を表現していると考えた。「あの白い塔はお線香のよう」という台詞があったが、白い塔は少女たちが燃やされることを意味し、線香は死別を意味していた。近いうちに燃やされるとも知らず、同じことを繰り返している少女達の短い人生を、坂入が充実したものにしようとしていたのが印象的だった。死ぬという自分の運命を知るも知らぬも悲しいことだと思った。

題名については、Sとは坂入の父のことで、Nは内藤さんに似た母を表しており、香りは生きた人間しか感じることができない何かだと考えた。

合唱曲「明日へ」の歌詞からは今を大切に生きようとする少女たちの姿が垣間見られた。

ラストシーンで髪を切ったのは、原さんと一緒に生きていく決意を表し、また残酷なループから抜け出すためであることが分かった。

照明では、坂入がSからの手紙を読む場面で、装置の台を緑色に染めていたが、これは、父的存在であるSに対する安心感を表すものと思われ、とても綺麗な世界観を創り出していた。音響は、衝撃的な音を用いてそれまでの雰囲気を壊したことにより、観客を惹きつける効果があった。発声もよくできており、役者の声が通っていた。紙飛行機を飛ばすシーンでは役者の動きが滑らかで柔らかな印象を受けた。

岐阜総合学園高校の皆さん、お疲れさまでした。

大垣北高校　　角田蒼